慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	パーネルの妨害戰術 : 反對黨の研究 (續篇)
Sub Title	Charles Parnell and his obstruction tactics
Author	板倉, 卓造(Itakura, Takuzō)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1959
Jtitle	法學研究 : 法律・ 政治・ 社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.32, No.1 (1959. 1) ,p.1- 42
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論說
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19590115-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

パーネルの妨害戰術

——反對黨の研究（續篇）——

板倉卓造

一　アイルランド國民黨
二　「途法もない馬鹿野郎」
三　妨害戰術の最初の發明者と實行者
四　報復手段として妨害
五　妨害に對する政府の作戰
六　「總司令官の天才」
七　ボイコット戰術の發明
八　討論延長と會議延長の動議
九　妨害四十一時間半
一〇　討論終結法の採用
一一　獄中にて休戰條約
一二　フェニックス公園虐殺事件
一三　藝術——パーネルの妨害戰術

一　アイルランド國民黨

反對黨は古からどこにもある。反對黨が政府に反抗して、國會で議事妨害（Obstruction）をやることも、また普通に行わ

れる所である。だが凡そ反對黨として頑迷執拗に反對一偏の行動を一貫し、議事妨害を以て唯一の戰術としたもの、十九世紀末期、英國下院に於てチャールス・パーネル（Charles Parnell）によつて率いられたアイルランド國民黨の如きは、恐らく諸國を通じて古今曾て類例のない所であろう。あらゆる一切の手段に訴えて議事を妨害し、議場を騷がして、英國政府を手こずらせ、惱ましとおして、政府が奔命につかれ、力遂につきて彼等の主張に屈するに至るまで、大膽頑强に反抗爭鬪するゲリラ戰法を、極端まで極用したものは、實にパーネルのアイルランド國民黨であつた。

そもそもアイルランド人はその民族、國語、歷史、宗教、文化等に於て、イギリス人とも、スコットランド人とも別種な國民性を以て、古來島内に獨立の王國を建てていたものであつた。それが十二世紀以後漸次英國王の支配に屬し、遂に一八〇〇年併合せられて、統一王國（United Kingdom）の一部を成したものの、しかもアイルランド人の多數は最初より英國との併合を喜ばず、獨立回復を企てて反英運動やむときなく、暗殺、暴動しきりに起つて難治の暴民化し、英國にとつては絶えざる惱みの種であつた。

右の一八〇〇年の併合約定によれば、アイルランドは英國下院に百名の議員を選出することを得、更に一八三二年には百五名に增員された。當時下院議員數はイングランドとウェールスから五一三名、スコットランドから四十五名だつたから、これに對してアイルランドの百名は、國會に於て相當に固まつた勢力であつた。ところがアイルランド議員は單一でなく、同島北部のアルスター地方は、民族的にアイルランド人ではない爲め、その地方から選出されたものは、英國トーリー黨（保守黨）であり、南部地方でも大地主の勢力下にあるものの多くは、ホイッグ黨（自由黨）かトーリー黨か英國派に屬していたので、アイルランド選出の議員は、決して全部が統合して一黨を成すものではなかつた。一八二八年ダニエル・オコンネルはカトリック系の議員を一團として、强力な一派を組織したが、四十名を超えることなく、時として僅かに十二名に激減したことさえある。

一八七〇年アイザーク・バット(Isaac Butt)が自治連盟(Home Rule League)卽ち後年の通稱アイルランド國民黨(Irish Nationalists)を創立し、アイルランド自治(アイルランドに獨立の國會を開設すること)を要求する運動を起したとき、黨の議席は俄然增加して五九名と稱するに至つた。最初は自由黨を支持し、必ずしも反對一偏の反對黨ではなかつたのみか、黨首バットは極めて溫良の人物であつたから、彼の時代の國民黨は少しも厄介な存在とは思われなかつた。後年一般に用いられるようになつたアイルランド「自治」(Home Rule)という言葉は、實に彼が始めて發明したものであつて、從來の過激な反英派が、英國との併合を「廢棄」(Repeal)せよと唱えたのを緩和して、爾來そう改めさしたものである(R. C. K. Ensor, England, 1952, p. 55)。しかるに一八七七年バットに代つて若いチャールス・パーネルが黨首となるに及び、一黨の態度忽ち一變して、妨害一途の戰法を以て政府に衝り、七八十名の黨員を擁して、自由黨政府にも保守黨政府にも共に仇敵として挑戰し、彼等は何でも政府に抗爭して("agin the Government")相手をイヤがらせ、一に議場を混亂に陷れることばかりした。しかもこれに對して政府は手も足も出ず、英國下院は長い間パーネル一派のアバレ放題に放置されたのである。それはパーネルが一八九〇年オッシー夫人(Mrs. O'shea)事件で俄然威信をおとし、ついで翌九一年急死するに至るまで、前後十年間も續いたのである。しかし後年グラッドストーンが遂にアイルランドに自治政策をとるの止むなきに至つたのは、全くパーネルの妨害戰術に惱まされた結果に外ならない。後代の黨首レッドモンドに至つて、アイルランド黨は自由黨政府に對しては好意を持つていたが、それでも決して常にこれを支持したのではなく、或時は野黨の保守黨に加擔して反抗したこともあるように、最後まで彼等は反對黨たる態度を變ずることはなかつた(Ivor Bulmer-Thomas, The Party System in Great Britain, 1953, pp. 29-31)。

アイルランド國民黨といえば、直に厄介な反對黨を連想せしめるほどに、その名は惡質反對黨の代名詞となつた。しかしそれは實は酷評であつて、國民黨の創立者たるバットにしても、後代の黨首レッドモンドにしても、彼等は決して無法な反

對者ではなく、彼等に率いられた黨員また必ずしも常に政府に反對ばかりしていたのではない。十九世紀の末期、パーネルが黨首であつた十餘年の間、英國下院を無茶苦茶に騷がした時代の妨害の記憶が、そういう惡質な連想と酷評を、後世までも拔くべからざるものにしたのである。

も一つはアイルランド獨立を暴力によつて回復せんとして、暗殺、暴動等手段を選ばなかつた當年のフェニアン黨（Feni-ans）、後年のシン・フェイン黨（Sin Fein）などと混同され、國民黨もまた同類と目された誤解の爲めに、彼等を蛇蝎の如くに憎む惡感情を生ずるに至らしめた事情もある。フェニアン黨、シン・フェイン黨は實際に暗殺、暴動を頻々と行つて、人を殺すことを何とも思わなかつた。しかし英國下院に於けるアイルランド國民黨は、決してそんな亂暴不逞のものではなかつたのみか、最も過激なパーネルその人は、下院議場に於てこそ議事妨害に一切の手段を執拗大膽に行うことを躊躇しなかつたけれど、暴力に至つては嚴に黨員を戒しめて、苟くも逸脫することを許さなかつた。當時フェニアン黨の本據は米國ニュー・ヨークにあつたが、パーネルの爲す所を手ぬるしとして、しきりに彼を難詰し、アメリカから援助の送金を絕つと脅やかしたこともしばしばあり、その爲めパーネルは人を遣つて辯明せしめたほどであつたが、彼は如何なる攻擊にも屈せず、斷じて暴力を用いることを承知しなかつた。パーネル一派が下院議場に於て行つた妨害は、議事法違反の紙一重の線まで迫まる極端なものであつたけれど、彼の一派は一度たりとも實力行爲に出たことなく、言論爭鬪以外に決して脫線しなかつた。

二　「途法もない馬鹿野郎」

それではパーネルの議場に於ける妨害行爲とは何であつたか。

パーネルが始めて英國下院に選出されたのは、彼が廿九歲のときの一八七五年である。彼は家產ゆたかなアイルランドの

名家に生まれ、しかも彼の幾代か前の祖先は英國からアイルランドに移住したもので、血統は純然たる英國人であり、且つ彼の大伯父（祖父の兄）はグレー及びメルボールン内閣の閣員で、後に貴族に列せられたほどの知名の政治家であつたのだから、パーネル一家は寧ろ親英的の一族であつた。しかるに彼に至つて排英反英の急先鋒に一變したについては特有の素因がある。それは彼の生母の氣ちがいじみた極端な憎英教育であつた。

パーネルの母デリアは米國婦人であつた。血統はまた英人であつたけれど、彼女の家は夙に米國に移住し、祖父は米國獨立戰爭に出征し、父も後年の對英戰爭に出て英國軍と交戰した一家であつたから、彼女は生まれながらにして英國及び英人を憎むの念に燃えていた其上に、人一倍の激情家で、英人といえば傲慢强慾、陰險で僞善で、要するに泥棒だと、相手かまわず何處でも口きたなく罵つて、人を驚かしたものであつた。時のアイルランド太守某卿に向つてすら、面前で英人を罵倒して憚からなかつた。彼女のこのヒステリックな言動は、人を惱ますこと甚だしく、遂には人々彼女を氣ちがい扱いするようになつたというほどヒドくなつた。この母に生まれ、この母に養育せられた子女の性格が、憎英的、反英的にならない筈がない。殊に父は早く死んで、母一人の手で育てられたのであるから、チャールスが英國及び英人に對して拔くべからざる憎惡心を植えつけられたのは、因果きわめて當然である。

だから彼は殆んど一生の最後まで英人を信ぜず、英人は僞善の惡人だと罵り、彼等は狼で、不正直で、利己的で、マキァヴェリー的陰謀家で、裏切者だと信じ切つていた。アイルランドの歷史で、反英革命運動の指導者の多くは、生來のアイルランド人よりも、移住の英人であつたといわれるが、それにしてもパーネル一家の如く憎英心の熾烈なものは、異數中の最異數で、到底常人正氣の沙汰ではなかつた。パーネル家には代々精神異常の遺傳があると、事實を指摘して說くものもあるけれど、チャールスの極端な偏質は、主として生母の遺傳と養育に原因するものであるようだ。

しかし父の生きている間のパーネル家は、決してそんな偏質的な家風ではなく、チャールスは幼少のときから英國の學校

に送られ、後年ケンブリッヂにも學んだのである。だがそのケンブリッヂにいた間の學業素行は決して香んばしいものではなく、とうとう卒業間際に、學友に暴行を働いたというので、退學を命ぜられた。彼は一生讀書が嫌いで、殆んど無學に近かつたように傳えられているし、また實際に彼の無學を證する幾多の實例が擧げられている。だから彼は裕かな遺產を繼ぎ、門地また高く、貴族的生い立ちの身でありながら、政界に入つてからの彼の周圍に集まるものの多くは、出身下等で、甚だしきは人を殺すことを何とも思わぬような兇暴無賴の徒さえいた。

ケンブリッヂを追われたのは、一八六九年彼が廿三歲のときだつた。それからの彼の生活は、アイルランドの鄕里（首府ダブリンから南方近距離）の豪奢な邸宅で、ダンスパーティーを催したり、廣大な領地で狩獵をしたり、日夜遊惰にあそび暮らしていた。母や姉達がパリに行つていたので、彼も時々フランスに渡り、そこでも相變らず惰け者の日を送つていた其うちに、たまたまアメリカから來た一美人に遭會した。彼はこの美人に熱烈な戀をなし、懸命に求婚したが、巧みに逃げられたのを、尙も追つかけてアメリカまで行つた處、「ただのアイリッシュ・ゼントルマンたるに過ぎない者」とは結婚しないと、最後にキッパリ拒絕された。この一言こそパーネルをしてアイルランドの國威の爲に憤起する決心をなさしめた動機であると、パーネル傳の一著者はいつている（St. John Ervine, Parnell, 1925, p. 85）。この一言によつて彼のアイルランド人たるプライドは無殘にも足下に踏みにじられたのである。英國人がアイルランドに壓制を行うのは、アイルランド人を劣等民族と蔑視するからである。アイルランド人たるもの猛然民族的自尊心を振い起して、敢然英國に宣戰し獨立を回復せねばならないと、深く決意を固めたのはそれからである。というのであるが、失戀してアイルランドに歸つてからのパーネルは、斷然政界入りを心中に決し、當時自治連盟を率いていたアイザーク・バットの下に參じ、一八七四年下院議員補缺選擧に立候補した。忽ちにして慘敗したが、翌一八七五年別の選擧區で再び補缺選擧に立候補したときは、最高點を以て當選したのである。彼が廿九歲の春である。

生來人並みはずれた神經質で、我儘で、强情で、感情的で、その上に遊惰で、學問ぎらいで、取り得といえば、秀麗な眉目と、貴族的な家柄と、彼の英語にアイルランドなまりが全然なかつたことだけだつた（アイルランドなまりの英語を使うものは、英國の社會で甚だしく輕蔑された）。政治家となつても、第一に演說が下手で、始めて選擧に出たときの彼の演說の如き、絶句ばかりして、後援者をいらいらさせたほどの大失敗を演じた。衆呼んで「途方もない馬鹿野郎」(a bloody fool) だといつた。その馬鹿がそれから五年後には、バットを退けてアイルランド國民黨の黨首となり、十一年後には「アイルランド無冠の帝王」(The Uncrowned King of Ireland) となり、英國下院を左右する一方の大勢力となるに至つたのである。

三　妨害戰術の最初の發明者と實行者

パーネルが英國下院に入つたときのアイルランド國民黨議員は五十九名であつたが、その大多數は黨首バットの溫和な自治主義を支持して、言動決して過激なものではなかつた。しかるにこれに對してバットの統率に服せず、極端に反英的な黨員が二人いた。その一人ジョセフ・ローネイン (Joseph Ronayne) は若年アメリカに逃げて金を儲け、アイルランドに歸つて南部のコーク市から選出されたもので、彼こそ後年パーネルによつて完成された議事妨害戰術の發明者であつた。他の一人ジョセフ・ジリス・ビッガー (Joseph Gillis Biggar) は中部キャヴァンから選出され、商賣はベルファストの豚肉屋で、人品素質ともに醜惡な男であつたが、議事妨害戰術の最初の實行者は卽ち彼であり、パーネルは實にこの男によつて戰術を親しく指導訓陶されたのである。

議事妨害戰術の發明者ローネインの理論は、極めて簡單素朴なものであつた。英國人はわれわれアイルランド人の提案を妨害する。われわれはなぜ彼等の提案を妨害しないのか。やることはそれだけなのだ。アイルランド議案が無視されるなら、英國議案も無視すべきだ。すべて立法をやめてしまえ。それが政策だ。しかるに我黨首バットは馬鹿で、あまりに紳士

的だ。われわれは皆紳士的すぎる。というのである。黨員中これに贊成するものは一人もなかつた。イヤ一人いた。右の豚肉屋のビッガーである。黨首バットは大におこつたが、その後久しからずしてローネインは病死した。その遺志をついで彼の理論を實行したのがビッガーである。パーネルが議員として始めて登院した其夜の議場で、彼はビッガーの議事妨害戰術の初演を實見したのである。

ビッガーはパーネルよりも二十歳近くも年上であつたが、容貌醜惡、擧動粗暴、正に商賣の豚殺したるに背かない獸的殘忍の男であつた。ディスレリーがこの男を始めて議場で見たとき、彼の得意の片眼鏡でツクヅク顏を眺めて、「こいつは妖魔（leprechaun）か」と評したという話が傳えられている。シェーキスピアの Tempest の中に出て來る半獸人のような男（Caliban）の再現だといつたものもある。商才があつて豚で產を成したが、その所行に至つては惡德非道、文字通り半獸人であつたようだ。この醜惡きわまる男とならんで、アイルランド黨席にすわつた長身でキャシャな、美男で整裝した若い貴族的なパーネルとの對照ほど奇なるものはなかつた。ただし彼等に共通するものが二つあつた。兩人とも教養が低く、且つ演說が大きらいであることだつた。

その演說の大きらいであつたビッガーに對し、黨首バットは何を思つてか、當夜の議場で、アイルランド暴動鎭壓法案に反對して、出來るだけ案の審議を引きのばす爲め、自由に演說することを指令したのである。演說ぎらいの筈であるビッガーは、意外にも喜び勇んで引き受けた。兄貴分のローネインから授けられた妨害戰術を實地に試みるのは、この時とばかりに思つたからである。果して彼は一人で前後實に三時間五十五分に亙る反對の長演說を打つたのである。その戰術の目的は當夜の議場を獨占して何時間でもシャベリまくり、敵を困憊せしめるにあつたから、論旨の內容などは問題でなく、彼は議案には直接無關係なカトリック教の祭式主義を攻擊したり、ながながとブリュー・ブックの諸冊を讀み上げたりして、いつまでたつてもやめない。そのうちに彼の發聲がかすれて、聞こえなくなつたのを機會に、議長ブランド（Brand）がビッガー

を制する爲めに、聞こえないと注意した處、それは自分の席が議長席と離れすぎているからだといつて、サツサツと他の議員の座席に割り込み、議長席に近寄つて、またまたブリュー・ブックを取出して讀みつづけた。その頃の議院法には、討論を停止せしめる規則がなかつたので、議長はこれをどうともすることが出來ない。政府黨（保守黨）も、反對黨（自由黨）も、大臣達も悉く疲勞し切つて、中には憤懣の色をなすものもあるけれど、夜は既に深更に及ぶも、ビッガーの長演說は娓々嫋嫋として果つる所を知らない。しかるにこの醜惡な面貌の男の口から出る辛辣な妨害演說を、恰かも天來の神の聲のように恍惚として聞きいつた一人の新議員がいた。今夜初めて下院に入つたパーネルである。一八七五年四月廿二日の夜のことである。

數日後、パーネルは新議員として處女演說を試みた。アイルランドは英國の地理的一地方ではなく、嚴然たる一國家であるとの趣意を陳べたのであるが、その演說は簡單で低聲で、終始オドオドした態度であつたので、少しも注意を引かなかつた。しかし英國下院で新議員が處女演說をする場合の心得として、其人たとえどんな雄辯の自信家であつても、議場の崇高莊嚴な光景に威壓されて、忽ち膽を奪われ、頓に發言の勇氣を挫かれたような臆病小心の素振りを、ワザにでも示して、ゆめゆめ生意氣な言動をしてはならぬことになつているのだから、パーネルの處女演說の失敗も、決して笑うべきではないのであるが、その後ときどき發言し質問した際にも、いつも吃りがちで、しかも議事規則も慣例も辨えない無知の動作が、同僚を顰蹙失望せしめた。だから彼は大抵沈默していた。

パーネルの名が始めて知られるに至つたのは、議院に入つてから一年餘を經た一八七六年六月卅日、アイルランド問題討議の際だつた。アイルランド所管大臣ヒックス・ビーチは、九年前マンチェスターで、アイルランドの過激黨二名が捕縛護送されるのを、一味の暴漢が途中に奪還せんとして、警官一名を銃殺したことによつて、下手人三人が死罪に處せられた事件に言及して、彼等を「マンチェスターの殺人犯云々」といつた。しかるにこの三人の處刑者は、アイルランド人の間に

は、「マンチェスターの殉難者」と敬稱せられるものであつたから、ヒックス・ビーチの言に憤怒したパーネルは、突然鋭い聲で「ノー、ノー」と叫び、靜肅の議場を一時に驚かした。ヒックス・ビーチがパーネルの方に向き直つて、殺人犯を辯護するとは何事だと睨みつけるや、滿場一齊に「取消せ、取消せ」と、パーネルに向つて怒聲をあびせた。若いパーネルはこの威勢に壓倒され、速かに閉口するものと思いの外、彼は敢然と立ち上り、極めて冷靜に且つ嚴然として、「余を以て殺人を辯護するものというけれど、余はマンチェスターに於て殺人が行われたとは斷じて信ずるものでないことを、ここに公言して憚からない」と堂々とやり返えした。威猛けだかにノシかかつたヒックス・ビーチは、この以外の反噬に會つて、いささか狼狽したようだつたが、再び本題に立歸り穩かに發言をつづけたので、事はそれだけですんだ。ところがこの事ひとたび本國アイルランドに傳えられるや、パーネルによつて始めて勇敢なる鬪士を得たることを喜び、彼の名は瞬時に國內に喧傳せられ、從來の溫和な國民黨中にも、ひそかに彼に囑望するものが出て、早晩黨首バットに代つて一黨を率いるものは、パーネルであろうという新轉機の端緒が、ここに突如として開かれたのである。

四　報復手段として妨害

この日よりしてパーネルは別人のように變つた。善い意味に於ても、惡い意味に於ても、彼の存在は英國下院の議場に認められた。彼は昨日まで引込み思案の、氣の弱い一田舍議員に過ぎなかつた。彼は時々發言することはあつても、演說の原稿を用意するのに、文法と綴りの誤を恐れて、一字一字、長時間かかつて細心に訂正し、しかもその演說は低聲でノロく、一語一語ポツリポツリと發音するので、とても間どろかしく、論旨がどんな重要な點に至つても、聲を高めたり身振りを張るようなことは殆んどなく、全身をコチコチにして、兩手を前身に組むか、時にうしろにまわして握るか、終始戰々恟々たる一小膽者であつた。しかるにこのパーネルが久しからずして大膽無遠慮に發言し、手を振り體を動かし、高聲急調に怒號

して、傍若無人の横暴者と一變するに至つたのであるから、彼のこの急變調を評して、彼の家の血統に傳えられる異常精神の發現だというものがあるほどに、人々を驚かしたのである。またそう評されるほどに、彼は今や驚くべき大自信家となつたのである。

最初に彼が謀叛の野心を起したのは、アイルランド國民黨の黨首バットを排して、自らこれに代わらんと企てたことであつた。バットは前にもいつたように、至極溫良の人物で、多年敵味方兩派から信用尊敬せられた老政治家であつたけれど、彼はそれだけにアイルランド國民の對英不滿を、勇敢に主張する氣力に缺けていた。だからアイルランド黨の主張する意見は殆んど英國國會でとおらなかつた。しかもまた英國國會の人々がアイルランド出身の議員に接するに親切丁寧、懇情到らざるなき好意を示したので、國民黨の鬪志は自ら挫折して、年々軟化するの一方であつた。と觀測したのがパーネルである。アイルランド黨が敵と親交するのは裏切行爲である。爭鬪のみが勝利の目的を達する唯一の戰法である。それには黨首バットは弱すぎる。先ず以て彼を黨から追うことを圖らねばならない。とパーネルは決意したのである。そしてこの決意を斷行するに屈强の相棒は、例の醜面の男ジョセフ・ビッガーであつた。彼等は英國下院で志を遂げるのは、協和（Conciliation）ではなく報復（Retaliation）である。その報復の手段は議事の妨害（Obstruction）であると、兩人堅く秘約して機の到るを待つた。一八七七年彼等は卽ちこれを決行したのである。パーネルはこのとき議院に於ける經歷はまだ僅か二年に過ぎなかつた。

議事妨害といえば、今こそ諸國どこの國會でも大小頻發して、少しも異とするに足らないけれど、八十餘年前の英國國會に於ては稀有の椿事であつた。それは英國國會で曾て議事妨害の例が絕無であるという意味ではない。歷史によれば幾多の實例が擧げられるけれど、英國下院は多年世界に於ける「議會の母」（The Mother of Parliaments）とて、威信最も高き模範的議會であり、また自ら「ロンドンに於ける最上のクラブ」（The best club in London）と誇るように、そこに集まる議

員はその出身經歷に於ても、個人的素質に於ても、英國最高社會の精華であつた。今日の英國では、老紳士が現役の職業から引退すれば、ゴルフをやるか、外國に旅行するか、老後の樂みは種々あるが、十九世紀の時代では、餘世を公共事業とか、地方または中央の公職につくすことを以て、上流社會に身を置くものの任と考えていた。だから彼等は概ね下院に入つて來たので、當時の下院議員には老人が多かつた。しかも老人の習性として、彼等は秩序を嚴守し、品位を保持することを尊んだ。彼等は法規を尊重し、慣例を大事にした。英國下院の議事が常に嚴肅に行われたのは、こういう特殊の事情があつたからである。ところが突然ここに異樣の人間が現われて、下院何百年來の高貴な傳統を破壞する亂暴を働くに至つたのであるから、老議員達を驚駭せしめたのはいうまでもない。殊に老議員を惱ましたのは、彼等はこれまで夜半頃には歸宅して安眠することを得たのに、二人の亂暴者が議事を引つかきまわして、徹夜、討論と採決の動議を繰返えしめ、或時は翌朝四時、五時までにも及ぶことがある。これには老體悉く疲勞し、精根殆んど盡きて、議場は睡眠不足の半病人を以て充たされた。

しかもかかる異變を釀もし出したものは、微力なアイルランド黨中の、そのまた微力の議員中のたつた二人の名もなき男だつた。その一人は神經過剩で、他の一人は無神經、その一人は地主の子で、他の一人は商賣が豚殺しであつたが、兩人ともヒドく無智で無教育で、一人はケンブリッヂを卒業前に放校され、他の一人はベルファストの小學校を出た程度だつた。二人とはいうまでもなく、パーネルとビッガーである。豚殺しのビッガーに至つては言動野蠻で、彼がベルファストなまりの英語でシャベる粗野な演說は、殆んど聞くに堪えないものであつた。パーネルまた同樣で、その英語こそ本物ではあつたが、口を開けばいつも白熱的狂亂の怒號で、しかも無學の爲め用語が滑稽なほど間違だらけであつたから、每度輕蔑嘲笑されるのを見て、アイルランド人でさえ心あるものは苦々しく思つた。下院大多數の英人議員は、是等たつた二人のアイルランド人の爲めに、議事を自由にかきまわされるを見て憤慨するけれども、その時代の議院法では如何ともすることが出來なかつた。

五　妨害に對する政府の作戰

兩人が議事を妨害するに用いた手は、彼等の仕組んだ芝居であつた。政府案が上程されると、パーネルが早速これに對する批評的意見を提出して、その意見をながながと陳述する。すると直ぐビッガーが立上つて、只今のパーネル君の意見には同意しかねると、その理由をまたながながと陳べる。代つてパーネルが立つて、ビッガー君は重要な點についてモット論明すべきものがあると注意するや、ビッガーは恰かも思い當つたように、パーネル君の注意は御尤もであるとか、イヤその御注意は當らないとか、何とかいつてまた長演說をつづける。するとパーネルが三度び起立して、ビッガー君は分らぬことを申されるといつて、彼またながながと反駁する。ビッガー更に三度立つて發言すると、パーネルまた立つ。議場は二人で獨占されて、二人の掛合い討論はいつ果つるとも覺えず。すべて是れ兩人が演出した掛合萬歲の芝居である。ところがそんなたくらみとは知らず、この有樣にたまり兼ねた癇癪持ちの一議員が、遂に憤懣を破裂して、兩人に向つて猛然吠えついた。それこそ彼等の思う壺である。この議員の怒聲をキッカケに、滿場忽ち騷然として、議事はどこかに吹つ飛んでしまつた。パーネル、ビッガー合作の芝居は、これでマンマと圖にあたつたのである。一八七七年四月十二日の夜のことである。

議事妨害に成切したパーネルの作戰の才智を、アイルランド國民黨中に認めるものが始めて出て來た。黨首バットは既に年老いて無能であるという聲を聞くようになつた。英國下院の尊嚴を維持する爲めには、バットの溫良性が必要であるけれど、アイルランド國民の要望を達するには、バットの戰法ではどうにも手ぬるい。否なバットは黨員パーネル、ビッガー兩人の獨走を制することも出來ないほどに、既に黨首たる權威を失つてしまつた。バットに代つて一黨を統率する有能の黨首を得なければ、アイルランド黨は早晩衰滅する。という空氣が漸く動き初めたと共に、パーネルに望みを寄せるものがポツポツ現われた。それではパーネルのどこに取りえがあるのかと問うものがあつた。彼等はそれに答えて、「パーネルはチッ

トも雄辯家でもなければ、普通人の持つている知能もないし、また議會の經驗とて甚だ乏しい。だが彼の長所はその驚くべきねばり強さ（テナシティー）にある。そのねばり強さで、みんなが讓歩しそうなとき、彼は頑然として頑張りとおす」といつた。パーネルの人物を評定するに、これ以上の名答はない。

パーネルの妨害策は、不屈の氣力を以て續行された。新聞はその都度、記事を滿載して詳報したので、パーネルは俄然有名となつた。それと共に彼はいよいよ自信力を加え、黨首バットの命を無視して、ますます議事妨害に暴走した。彼に從うものは僅かに四人であつたが、よく翌朝七時頃までも議事を引き摺つたことがあつた。一八七七年七月廿五日の夜、トランスヴァールを併合する南阿法案の討議中、またも全議場を攪亂した。彼は例の金切り聲を張り立てて、反對演說をやつた。「余は英國が多年わが鄕國のことに干涉した結果と、英國の殘忍壓制の結果を、滿身に經驗した國から來たアイルランド人として、本案に關する政府の意圖を防止妨害するに、特別の滿足を感ずるものである」といつたのである。すると大藏大臣サー・スタッフォード・ノースコートは、直に立上つて、かような暴言を吐く議員は、來る金曜日（廿七日）まで發言討論することを停止すべきものであると、懲罰動議を提出した。ところがこれはノースコートの聞きちがえであつて、パーネルは「政府の意圖を防止妨害する云々」といつたのを、「下院の意圖を防止妨害する」と感ちがえし、これは下院の尊嚴を冒瀆するものであると早合點したのが失敗であつた。しかるに議長もまた輕々しく藏相ノースコートの言に誤まられて、パーネルに辯明を促がしたのである。彼はそれに應ぜず、更に政府を攻擊して屈しないので、議長は遂に退場を命じた。滿場の議員はこれで厄介者を放逐した氣持ちで、ホットしていた處、ノースコートの輕率がすぐにわかつた。パーネルはビッガーに迎えられて、再び議席に歸つて來た。歸り來るや彼はまた立つて、南阿法案の反對演說をながながと續けたのである。

これには政府も政府黨も反對黨も殆んど困つてしまつた。しかし最も困つたものは議長ブランドであつた。

英國下院議長の歷史を遡れば、一三七六年（エドワード三世の治世第五十年）に選擧せられたサー・ピーター・ド・ラ・メー

アーの名が最初に擧げられるから、ブランドのときまで實に五百年もたつているのだが、少なくとも一六八八年の有名な「光榮革命」から、彼の時代に至る二百年近い間、議長の日夜は大體に於て平穩無事で、議事が規則と先例を守つて行われることに注意する以外、何等心を勞することはなかつた。ところがアイルランド黨が興つてから全く一變した。彼等の最多數は英國議會の傳統も歴史も眼中にない外國人であつて、熱烈な反英心を懷き、强烈な團結力を以て英國政府に挑戰するのであるから、議會をひたすら神聖視する英國議員にとつては、殊にパーネル一派が現われて以來、議會の尊嚴が犯される現情は忍びがたい所であり、その中にも尊嚴守護の大責任ある下院議長ブランドの苦勞は、歴代議長の經驗しない深刻なものであつた。

ヘンリー・ブーヴリー・ブランド（Henry Bouverie Brand）は、英國下院史上の名議長と稱せられる一人である。彼はアイルランド黨の行動を以て、議會に於ける言論自由の特權の濫用であるとし、これを濫用して下院議長の權限と權威を犯すのは、卽ち下院の存在を無力化せしめんとするものであるとして、彼等に對し遂には斷然たる手段に出なければならぬと心に期したものの、最初は努めて內心の怒を制して、出來るだけ溫和に妥協的に彼等の妨害行爲を鎭めんとした苦心は、每度の彼の顏色と眼光によつて察しられたといわれるように（Michael MacDonagh, The Speaker of the House, 1914, p. 317）、議長ブランドは飽くまで下院の傳統を維持する爲めに、極力隱忍したのである。だがパーネル等の妨害は改まる所なきのみか、却つて日に增長する一方であつた。ここに至つてさすがの議長も勘忍袋の緖を切つて、前記トランスヴァールの併合案討議騷亂の當夜、遂に英國國會史上曾てなき峻嚴な宣言を發したのである。

「議員の何人も正當合理の理由なくして、故意執拗に公務を妨害するものは、議會侮辱罪に問わるべく、議會の裁定する所によつて、譴責、登院停止または拘禁の罰に處せられるべきものである。」

というのである。ところが傳統と舊慣を重んずる英國下院は、ブランド議長のこの宣言を容れることを欲しなかつた。あれ

ほどパーネル一派の爲めに惱まされ、引つかき廻わされながらも、議會の傳統舊慣こそ尊しとして、政府も全下院の大多數も、議長の宣言を採用するに至らなかつたのである。

しかるにそれから六日目の七月卅一日（一八七七年）の夜、下院議場は史上最惡の騷動を勃發した。前日の南阿法案が再び討議にかかり、政府は如何なる妨害を排しても通過せしめんとの決意を以て臨んだ。政府側は惡戰を豫想し、その作戰として政府黨員を數グループに別け、各グループに晝夜それぞれ出席の時間を割當て、交代して議場に陣取り、入りかわり新手を繰り込んで、敵の引き延ばし戰略に對抗する妙案を案出したのである。かくて戰鬪は五時を以て開始された。これに立ち向つたのがパーネル外アイルランド議員たつた七名であつて、國民黨を含めた全議院を敵にまわして對戰したのである。討論は夜を徹して行われた。政府黨の各グループは適時に新陳交代して味方を援け合うので、夜戰の强行に少しも疲勞を見せず、作戰大に圖に當つたのであるが、パーネル等僅かに七名の寡兵ながら、細心嚴肅に秩序を守つて、言動いささかも逸脫しないのに反し、委員長（當夜は全院委員會であつた）自ら反則して逆襲せられ、それに陳謝するような失態を演じ、政府側自身却つて議事を混亂せしめる場面さえあつた。だが翌朝八時十五分に至り、徹夜政府の大軍に對し不眠不休の惡鬪十五時間に及んでは、さすがのパーネルも困憊その極に達し、遂に交代して退席した。しかるにそれから四時間の休息後、十二時十五分彼はまたまた議場に現われ、討論を繼續して、最後の採決まで議席を去らなかつた。交戰前後實に二十六時間に及ぶ其内の二十二時間は、パーネル自らこれを陣頭指揮したのである。

この夜のパーネルの行動が、英人を極度に憤怒せしめたのは當然であるが、穩和な黨首バットもパーネル等の亂暴にたまり兼ね、如何にもして抑止せんと試みたが、既に老衰した彼の力ではどうにもならなかつた。これに反してパーネルと其相棒ビッガーが、事件の直後アイルランドに歸つて、ダブリンに着くや、アイルランド人は恰かも凱旋將軍を待つように狂喜して彼等を歡迎した。殊に暴力主義のフェニアン黨は、この機會にパーネルを自派に引入れんと切りに誘惑した。パーネル

は頑として拒絶し、暴力を以てする反英運動を排撃する彼の一貫せる信念を少しも動かさなかつた。彼はフェニアン黨を利用することはあつたが、彼等には最後まで利用されなかつた。米國にあるアイルランド人中には、フェニアン黨の勢力が强烈で、英國內の同黨の運動は米國からの多額の送金で支持せられ、パーネル一味もまた其恩惠に浴していたのであつたから、在米アイルランド人の壓力は相當有力であつたに拘わらず、パーネルは一切これを退けて、彼等の暴力主義には絕對に反對した。その結果彼等も遂にパーネルの頑張りに屈讓し、殊に英國議會に於ける彼の成功を傳聞して、彼等在米アイルランド人の大多數は、今や大に彼を支援するに至つた。

六　「總司令官の天才」

多年アイルランド國民黨を指導したバットは、老病、老衰、老貧して、遂に一八七九年五月老死した。パーネルは既に實力上黨首であつたが、バットの死後いよいよ實權は彼の手に歸した。彼は年まだ卅三歲、下院にあること僅かに五年にも足らない短い經驗を以て、今やアイルランド第一の政治家となつたのである。その年の末、アイルランド窮民の救助資金募集の爲め渡米し、在米同國人の間を奔走すること三ヵ月、足跡一萬六千哩に及び、四萬ポンド（今日の邦價で四千萬圓）の大金を集めた。その間も在米の過激派から暴力革命を强要せられたけれど、彼はただ耳に聞くのみにして、一言もこれに答えなかつた。それに拘わらず彼の渡米は大成功で、殊に米國國民から最高の名譽を以て歡迎されたというのは、米國下院は彼を議場に招待して、彼の演說を聞くの尊敬を以て待遇したのである。これまでこの名譽を與えられた外國人は、獨立戰爭の助力者フランス人ラファイエットと、チャールストンのイングランド僧正（アイルランド人）と、ハンガリーの愛國者コッスートの三人だけであつたから、パーネルの名聲は大西洋を超えて、東西に轟き渡つたことになる。

彼が八年前パリでアメリカの若い一美人に逢い、彼女はパーネルを散々にジラした擧句、彼がアイルランド人であること

を輕蔑して、求婚を拒絶し、彼に極度の侮辱を與えたことは、先きに記した所であるが、この度びの渡米中、パーネルは彼女を訪ねて再會した。容色少しも衰えず、昔ながらの美人で、しかもなお未婚であつた。彼女はパーネルの名聲今や隆々たるを見て、今度は自分の方から心動き、エリザベス・ブロウニングの戀の詩一句を書いた紙片を、彼の手に握らした。ところが無學な彼はその詩を解せず、また既に往年の心情も失つているので、そのまま別れた。それから數か月たつて、彼女はパーネルの兄妹に會つた。そのとき兄妹兩人から昔話を持出したところ、彼女は忽ち興奮して、「お偉い御兄弟のチャールスはどうしていらつしやいますか。トテモ有名になられたではありませんか」といつて言葉が途絶え、ため息きをついていたようであつたが、兩眼に涙をたたえ、突然聲を立てて泣きくずれた。「なぜ私はあの方と結婚しなかつたのでしようか。そうしたら二人はどんなに幸福であつたでしように」と心底から後悔したという話が傳えられているように、パーネルはアメリカ國中にも有名になつたのである。

彼は米國に於てそれほどの成功を收めて、一八八〇年三月廿一日アイルランドの南岸クインスタウン港に歸着した。その三日前に下院は解散されていた。そして總選擧は歸國十日後の四月一日に行われることになつていた。それでは選擧に臨む準備の餘日は殆んどない。しかし彼はアメリカに於ける大成功に、一層の自信を強くして歸つて來たのであるから、アイルランド國民は彼を迎えるに、必ずや絶對の忠誠を以てするものと、深く心中に期待したのであつた。そこで意氣揚々とクインスタウンに上陸した處、例の暴力主義のフェニアン黨の代表者が、彼を迎えて傳達した言は、彼等はパーネルの立憲主義には最早や信頼せず、また黨として今度の選擧には彼に協力することを拒絶するという、全く以て意外の反逆的通告であつた。

果してその直後、一選擧區の演說會に於て、一團の暴徒がパーネルを襲い、演壇から彼を引きずり降ろそうとして、ヅボンを引きさき、雞卵を彼のヒゲになげつけて、卵の身が着物にタラタラと流れるような暴行を加えたのである。だがこの無

法亂暴の襲撃に對して、パーネルの聲色は少しも變ぜず、自若として、しかも犯すべからざる威嚴を以て彼等に臨んだ堂々たる態度の見事さは、後にアイルランド黨内に重きをなしたトーマス・オコンナーが、そのときパーネルに隨行した一人に、「パーネルはどんな顏をしていたか」ときいたら、「銅像のようだつた」と答えたという挿話の通りであつた。後年アイルランド黨の黨首となつた有名なジョン・レッドモンドもまた其ときパーネルと一緒に暴行に遭い、顏面に負傷したのを見て、パーネルは「なんにしても君は私の爲に血を流したのだ」と、年下のレッドモンドをいたわつた。その他諸所の選擧區で、パーネル派の候補者は皆同樣の妨害を蒙つたけれど、彼は斷乎として暴力主義のフェニアン黨と戰い、遂によく選擧に勝ち、パーネル自身は三か所で當選したほどであつた。彼はコーク市を選び最後まで同地を代表していた。

この總選擧後、アイルランド黨は前黨首故バットの後任者を選擧する爲め、一八八〇年四月一旦集まつたが衆議決せず、翌五月、對抗候補者ウィリアム・ショウを敗つて、パーネルが正式に選任された。ただしその差は僅々五票であつた。蓋し競爭者ショウは稀に見る思慮堅實な人物で、しかも信用ある實業家であつたから、彼を推すものが多數あつた爲めである。斯くしてパーネルは今や名實ともにアイルランド國民黨のリーダーとなつたのであつて、年まだ三十四歲の若者であつた。後年パーネルを黨から放逐した發頭人の一人ジャスティン・マッカーシー（歷史家としても有名である）が、或人から何がパーネルをあれほどに偉くしたのかと問われたに對して、「彼は總司令官の天才を具えていた。われわれは豫め政策の線を定めるには、何かの役に立つたかも知れないが、しかし一朝危機に際會し、卽座に對策を行わねば、後に重大な結果を見る恐れがある場合、われわれは何の用をもなさず、徒らに右往左往するだけであつた。ところがパーネルは瞬間に決斷して、遲疑することなく直に事を斷行した」と答えたという（St. John Ervine, Parnell, p. 148）。

マッカーシーがいう如く、パーネルは「總司令官の天才」を以て、アイルランド黨を率いた。しかしそれは專ら議會に於ける妨害作戰の線内であつた。しばしばいう通り彼は暴力革命によつてアイルランドの獨立を圖らんとする運動には絕對同

意せず、彼の妹アンナが革命運動に參加して、熱狂すると聞いて、彼女と義絶したほどであるのに、英國下院に入つては、彼こそ最も頑强な反政府軍の總司令官であつて、アイルランドに關する政策について、徹底的に政府と抗爭することを止めなかつた。その爲め黨內が一時分裂したようなこともあつた。前記の總選擧の結果、グラッドストーンの第二次自由黨內閣が成立したのであるが、アイルランド黨內の一部に、自由黨を以てアイルランドの味方と信じ、政府側にまわり、與黨席に移つたものもあつた。これに對しパーネルは英國政府がアイルランド黨の全要求を容れるまでは、飽くまで反對黨であると宣言して、殘黨を率いて頑然反對黨席に陣を布いていた。

七　ボイコット戰術の發明

ここでチョット當時のアイルランドの國情について一言する必要がある。アイルランド人の大多數は貧困な農民で、土地は大地主の手に握られ、その土地を小作して哀れな生活を營んでいた。元來が大體瘦地であるので、働けども貧しかつた。農民はジャガ薯を常食とし、きたない土間に住んでいた。だから一朝飢饉に襲われたら餓死するの外はなかつた。ところがその飢饉が年々襲つて來るのであつた。しかも地主の多くは貪慾無慈悲で、小作料の取立てに假借する所はなかつた。その爲め地主と小作人の爭は絶えるときなく、若し小作料を怠つたり、地主に反抗したりすると、地主は容赦なく土地を取上げて、入札にかけて他の小作人に貸付けた。いわゆる百姓騷動は國內到るところに續出したのである。その農民がまた氣が荒く、暴力を振つて地主や差配人の家を襲擊し、家財を破壞し、家畜を慘殺し、火を放つて穀倉を燒くような狼藉を働くのであるから、地主の方も惡るければ、農民の方も無法であつた。實はパーネルの如きもその被害者の一人であつて、彼の農地には百姓は一粒半錢の小作料を拂うでもなく、彼の獵地は彼等の荒らすままに荒らされていた。しかも百姓等はそれを恩惠とも有りがたいとも感ぜず、當然のことのように思つていたのだから、當時の農民は大分惡質であつたのが事實である。し

かしまた政府の方も農民の貧困を救うべき適當の方策を講ずることを怠り、彼等の無法を咎めるに偏して、毎度嚴法嚴罰を以て臨むだけであつた。これがアイルランド國民の英國政府に對する不平であり、その不平と貧窮に堪えずして、多數のアイルランド人が續々米國に流亡し、その流亡したアイルランド人が英國に對する恨を忘れず、過激な反英運動を起して、本國に於ける暴力革命を煽動し、續々多額の援助金を送つて、有力に叛亂を支持することにもなつたのである。

當時に於けるアイルランド農民騒動の責任は、だから農民にもあり、地主にもあり、また政府にもあつた。だが下院に於けるアイルランド黨は專ら政府を責めて、農地改革と農民救濟の對策を迫まることに攻擊を集中した。これを迫まるに黨中硬軟二派あつて、比較的穩和論をなすものと、急激論を唱えるものとに別かれたこともあつたが、パーネル一派は無論その後者で、遂に急激論を以て一黨を制するに至つた。そしてパーネルが名實ともに黨首たるに至つたとき、アイルランドの國情は、農民大暴動の爆發目前にせまり、殆んど內亂の危機にあつたといつてよいほどの切迫した形勢であつた。パーネルは國內諸地に遊說して、農民に暴力行爲を戒しめ、立憲主義によつて改革の目的を達すべきを力說するに全力をつくしたが、過激なフェニアン黨の氣勢が猛烈で、暴動は到底阻止するに由なき危急の狀態を、英國政府のディスレリー內閣も、グラッドストーン內閣も、國會の保守黨も、自由黨も、否なアイルランド國民自身如何ともすることが出來なかつた。

議會に於ては、パーネルは政府を攻擊するに急激であつたが、アイルランドに於ては、如何にもして暴力の橫行を抑えんとして、苦心に苦心を重ねた。その苦心の結果、虐げられた農民を救う爲めに、彼が案出した抵抗策こそ——それは消極的抵抗策（passive resistance）と稱すべきものであるが——暴力に代つて暴力以上の効果を擧げた無抵抗戰術であつた。今も用いられるボイコット（Boycott）の戰術が卽ちそれである。ボイコットはパーネルが始めてアイルランド農民に敎えた新戰術であり、彼は實にその發明の元祖である。一八八〇年九月十九日、エンニスの一小村で、今にも蜂起せんとする殺氣立つた農民の群衆を前に、彼が辯じた演說に發源する。

彼は群衆に向つて、「來議會の土地改革法案の程度如何は、諸君が今冬の活動の程度を決するものである。それは諸君の不當地代不拂の決心、農地不立退きの決心、追い立てられた農地の賃借には誰も入札しない決心、入札する不正の者を阻止する爲めに强力な世論を起す決心――これ等決心の程度如何を決するものであるが、若し諸君の隣人中、追い立てられた農地を入札賃借する小作人があつたら、諸君は彼をどうするか」と問うた。するとパーネルの演說の一語一語を、むさぼるように聞いていた農民の群衆は、忽ち一齊に「殺してやる」「打殺してやる」と叫んだ。パーネルは彼等の靜まるのを待つて、彼の得意の姿勢――例の兩手をうしろにまわし、徐ろに演說を進めた。

「今誰かが、そんな奴は殺してやるといつたようだ。だが私は諸君にモットよい法があることを告げたい。モット基督敎徒的で、モット慈悲深く、見放された罪人に悔悟の機會を與える方法である。」

農民達は動搖した。がパーネルは聞く者の心膽を突き刺すような聲で語をつづけた。

「追い立てられた者の農地を、代つて手に入れた者と、諸君が路傍で、町の道なかで、店先きで、市場で、お寺で、どこでも出遭つたら、その者に見向きもせず、その者と口をきかず、その者をチョウド昔癩病人にやつたように彼の身邊から飛び離れて、彼が犯した罪惡に對する諸君の憎しみを、彼に存分見せてやれ。そうすれば正義の人々の世論に背き、諸君の間の不文の法律を破るような强慾な恥知らずはなくなるに相違あるまい。」

地主に從う者を村から貝殼追放（オストラシサイズ）せよというのである。村八分にせよというのである。集まつた農民達には言々まことによく分かつた。それから三日後の一八八〇年九月廿二日、メーヨー縣の地主エアーン卿の差配人英人ボイコット大尉（Captain Boycott）に對して始めて實行されたのである。小作人等は彼等が適當と思う小作料を差配人に申出たが、彼は立所に拒絕した。小作人等またそれ以上の料金を拂うことを拒絕したので、差配人ボイコットは土地回復訴訟を提起した。ところが小作人等はその訴訟令狀送達人を脅やかして、令狀を配達せしめなかつたのみならず、ボイコット家の使用人、作男、馬飼等

をみな同家から引揚げしめ、ついで商店も、鍛冶屋も、洗濯屋も出入りしなくなり、手紙も、電報も配達されなくなつた。結局、軍隊と警察と野砲兵の保護の下に、オレンジ黨員（新教徒の團體で、アイルランド自治に反對する一黨）五十人が來援して、五十日目の十一月十一日、ボイコット一家はヤット救い出されたのである。一家は遂にその地を立退いて再び歸つて來なかつた。

それから地主と彼等の差配人に對する農民のボイコット運動は、急速にアイルランドの諸所に傳播して、全土に波及する勢をなした。地主と政府は爲す所を知らなかつた。パーネル一派の農民ばかりでなく、暴力革命を圖るフェニアン派の一黨も共にこれに加わつたからである。だがパーネルはこの新戰術を農民に教えて、暴力亂用の罪を犯すことから、アイルランド國民を救つたのである。暴力に代えて「モット基督教的で、モット慈悲深い」武器のあることを教えて、それが完全に成功したのである。パーネルは議會に於ける妨害には、有らゆる手段に訴えることを躊躇しなかつた。しかし彼は議場に於て苟くも暴力に訴えることはしなかつた。と同樣にアイルランドに於ても彼は斷乎として暴力の使用に反對した。彼は極めて稀れに激烈な煽動演說をして驚かしたことはあるが、曾て暴動や暗殺を使嗾したことはない。ボイコットは彼の抵抗戰術の極限であつて、實に彼が苦心の苦作であつた。それが今日世界の到る所に行われるボイコットという無抵抗主義の抵抗戰術である。

八　討論延長と會議延長の動議

しかしパーネルの苦心は、ロンドン政府にも、ダブリン政府にも通じなかつた。アイルランドの農民騷動の首魁は、パーネルとその一派であるとし、彼等は農民を煽動して小作料を拂わず、土地回復訴訟に反抗し、地主の取上げた土地の轉貸を妨げ、陛下の臣民の間に離反を生ぜしめる陰謀を企てるものであるとして、同年十一年（一八八〇年）アイルランド太守は、

突然パーネル等十二名を起訴した。若し陪審員が彼等を有罪と認めることをためらつたら、斷然人身保護律を停止して、直に逮捕投獄する意氣込みで、翌一八八一年國事犯裁判が開かれた。ところが案の定、陪審員の意見が一致しなかつた爲め、パーネル等十名は釋放された。彼は法廷を出るや、すぐ英國行きの船に乘つてダブリンを去つた。

パーネルは決して暴動を煽動したことはなく、否な暴動をとめんとして、その代りにボイコットの手段を農民に敎えたのである。しかるに地主側に於て嚴しく農民から土地を取上げて追立て、彼等を行きどころのないものにしたのは、農民等が何年も小作料を拂わない爲めでもあつて、地主だけが非難さるべきものではなかつたけれど、兩者の關係が年々惡化して、地主は官憲に訴えて農民を抑えんとするに對し、農民は暴力によつて地主に復讐せんとする不穩沙汰が、既に一八七七年以後頻發し、しかも年を追うて激增激化する一方であつて、パーネルがボイコットを案出した一八八〇年は、その最近の四年間に土地の追立てが約五倍、暴動事件が十倍以上に達する危險の最も切迫した年であつた。政府がパーネル一味を捕えんとしたのも、この危險の形勢に驚いたからである。

遂にその翌一八八一年一月に至つて、グラッドストーン內閣はアイルランドに身體財產保護法なるものを布き、人身保護律を一時停止して、警察の見込みにより容赦なく逮捕監禁を行う彈壓を以て臨むの決心をなし、一月廿四日これが法案を下院に急遽提出したのである。

この法案はグラッドストーン首相自身も、實は提出を躊躇したほどの彈壓的なものであつたから、アイルランド黨がこれに眞向から大反對したのはいうまでもない。彼等は最初から猛烈な妨害手段に出で、下院に上程された當日午後四時の開會と同時に、政府に向つて攻擊を開始し、夜半を過ぎても止めず、翌日午前二時に至つてヤット退散したが、これは攻擊の序の口で、數日後の一月卅一日に及んで、遂に英國國會あつて以來の最長期戰を開始したのである。

この日は月曜日であつた。常例の如く午後四時開會するや、グラッドストーン首相は同夜を以て討論を終結すると宣言し

た。だが前にも一言したように英國下院にはまだ討論終結の規則はなかつた。アイルランド黨は首相の宣言をキッかけに、政府横暴の攻擊から論戰を始めた。陣頭に立つたのは、いうまでもなくパーネルである。ながながと演說をつづけてとどまる所を知らない。彼は雜誌「エディンバラ評論」を手にし、その所載の一論文の中から、彼所の章句、此所の一節を引用して、論旨をダラダラと引きのばし、一人で議場を獨占した。これではグラッドストーンの宣言のように今夜中に討論を終るなぞ出來る筈がない。政府黨議員の間から、パーネルは法案に直接關係ないことばかりいつて、時間をつぶしているのだから、議長は彼に注意されたいという聲が再三起つた。議長ブランドも遂にパーネルに向つて、「あなたは本院の忍耐心を非常に苛酷にためしているものといわざるを得ない」と宣告したところ、パーネルは卽座に議長の言を取上げて、彼れ特有の氷のような皮肉な語調で、「私は議長の命に決して背むこうとは思わない。しかしこの討論中に於て、本院の忍耐力を非常に苛酷にためさねばならないといわざるを得ない」と言いかえした。

討論は午前一時までつづいた。いつもなら散會する時刻である。しかしアイルランド黨はここで討論延長（Adjournment of the debate）の動議を出した。法案の成立を阻止する爲め、討論を打切らず、續けて他日に引きのばさんとする作戰である。アイルランド黨以外の滿場の全議員は激昂し、グラッドストーンは立所に延長動議を拒否すると言明した。かくなれば双方徹夜の覺悟で戰いぬかねばならない。そこで政府黨もアイルランド黨も決意をきめ、陣立を立て直してリレー作戰の戰法に出た。卽ち政府黨は議員を數隊に別け、或隊は議院內にとどまり、他の隊は家に歸つて少時間眠むり、それが定時交互に入り換つて、議場で反對黨と對峙するのである。議長さえも幾度か代理議長と交代した。アイルランド黨の方も手を別けて、院內のあき室に這入り、そこで寢ながら待機した。例の怪物ビッガーは圖書室の隅で寢ていた。政府黨の議員の中にイタズラをするのがいて、圖書中の一番重い大きい本を取出し、それを過つて手からすべつたように、ビッガーの身邊に大音響を立てて落した。それを何べんもやられるので、さすがに猛き怪物も、トウトウ逃げ出したというようなことまでやつ

た。

だから議員は絶えず議場を出たり這入つたりして、議席にとどまるものは極少數で、彼等はアイルランド黨議員等の入り代わり立ち代わり辯ずる長演說を、大半居眠りして、夢うつつに聞いていた。その間にもパーネル一派は頻繁に討論延長の動議と會議延長（Adjournment of the House）の動議(註)を提出して、その都度動議採決の爲め議員は驅り出されて議場に戻るが、それがすむとまた散つて行く。するとアイルランド黨は定足數が缺けていると、故障をいい立てるのでまた呼び戻される。夜を徹してこんなことを繰返えした。

（註）その日の議案の討論または會議を途中で休み、翌日または所定の日に續行しようという動議である。「引き延ばし動議」（Dilatory motion）といわれる。ともに反對黨の議事妨害策である。

論爭はつづいて翌火曜日の朝となつた。パーネルの崇拜者にティモシー・ヒーリーと呼ぶ若い有能な、しかも非常に雄辯なアイルランド黨議員がいた（後にはパーネルに背いたが、アイルランドが獨立して自由國となつたとき初代の總督となつた）。八時、彼は會議延長の動議を出して、その說明に二時間半の長廣舌を振るつた。それは辛辣で、皮肉で、しかもまた極めてユーモアに富んだ名演說であつた。

「われわれアイルランド議員を指して、少數の分際で、多數を打倒せんとするものだとよくいわれる。ところが其いわゆる多數は家に歸つて寢ていた。院內にいる政府黨議員で目を覺ましていると思われたのは、彼等の中に、われわれの演說を妨害しているものがあるので分かつた。」

すると政府黨の一議員が起立して、只今の言は動議とは無關係であり、規則違反ではないかと、議長に訴えた。このとき議長席にいたのは代理議長であつたが、

「あれは規則違反とは思わない。しかし彼の議員の言が、專ら時をかせぐ爲にしていることの分かつたとき、遂に議院の

勘忍袋の緒が切れても、その人は驚いてはならない。」

九　妨害四十一時間半

火曜日の討論も一日中つづいた。その夕刻に至るや、下院の傍聽席は早くから滿員となつた。アイルランド黨の前代未聞な妨害戰術が、院内院外に好奇心と公憤を捲き起して、その實況を見んものとつめかけたのである。「われわれの祖先が生命をかけて得た古い貴重な下院に於ける討論の自由に對して拂う代價はこんなものなのか」と怒るものもあれば、「さて結局どうなるのか」と面白半分に集まる野次馬もあつた。殊に貴族院議員傍聽席は立錐の餘地なき雜沓で、その中にビーコンスフィールド侯（ディスレリー）が例の片眼鏡をかけて、熱心に議場を見おろしている姿が、議場の政府黨最前列に肅然として着席している首相グラッドストーンの姿と對照して、當夜の光景を一層物々しいものにした。

論戰はいつまでもつづいた。時刻は既に夜半を過ぎている。しかしどこまでも議事を引き延ばすのが目的なのだから、アイルランド黨は當面の議題とは全然關係のないことを持出して、際限もなく辯じ立てるのである。パーネルはその發言中すでに四回までも問題外の辯だとして、政府黨席から抗議されたのに、知らぬ顏をして尚も辯じつづけるので、政府黨の一議員某は遂に我慢できず、代理議長に向つて、パーネルを登院停止の罰に處すべきものと提訴した。代理議長はこれに取合わず、パーネル更に辯ぜんとするや、某は今度はパーネルの相棒ビッガーが自分を罵つて、「途法もない馬鹿野郎だ（a bloody fool）」といつたと議長に訴えた。議長はそれは正に規則違反だが、しかし議長には聞こえなかつたといつて、再び取上げなかつた。ところが其ビッガーがいうに、彼が先刻動議採決で廊下に出ようとしたとき（英國下院の採決は、議場外の廊下つづきの廣間で行われる）、某は彼に近寄り「ビッガー、お前はずうずうしい無賴漢だ」（a mean imprudent scoundrel）と罵つたと議長に反訴した。よつて議長は某に辯明を促がしたところ、いかにもその通りであるが、ビッガーの方から最初に「馬鹿野

郎」といつたから、議場で彼を見るや「無賴漢」といつてやつたのだと、正直に自分の暴言を認めた。ここに於て議長は「それならあなたは陳謝すべきだ。ただしそれはビッガー議員に對してではなく、下院に對して陳謝するのだ」と宣告したのに應じて、某は速かに下院に陳謝したが、同時にビッガーもまた同樣であるべきことを求めた。しかるに議長はそれを取上げず、事件はそれで終つたと宣告した。そこで討論はまたつづいた。本當に赤誠こめて政府に失政の反省を促がし、滿場の睡氣をさます熱辯を振うものもあれば、頻々たる討論延長、會議延長毎に、必ず何か一言するものがあり、夜が明けようと、議席が無人になろうと、テンデ意に介せず、滔々と一人でしやべりつづけたものもあつた。

三日目水曜日の朝となつた。

八時四十五分、首相グラッドストーンと在野黨（保守黨）の下院首領ノースコートが、同時に議場に入り、右と左の前列席に着いた。兩者の樣子より察するに、タダ事ではないように思われた。

正九時、正議長ブランドが現われて、代理議長と代わつた。

そのとき例のビッガーが演說していた。議長は手まねで彼に着席を命じた。議長の顏色には苦惱の影があつた。用意した演說の草稿を持つ手がふるえていた。

「身體財產保護法案の上程を求める動議は、今や五日以上も討議されている。會議は去る月曜日の四時に始まつて、本日水曜日朝まで四十一時間つづいた。その間下院は頻々たる引き延ばし動議の討論を以て、絕えず占領されたのである。しかもそれは長たらしい退屈な討論であつたが、その動議を支持したものは、下院の一般感覺に反する少數派であつた。その爲め議長と下院の敏速な干涉を必要とする危機が起つた。普通の法規では秩序あり實効ある討議を行うことは無力であることが分かつた。約一か月前女王陛下の勅語を以て勸告せられ、また絕對的多數黨によつて、國家の爲に緊急と宣言せられた重要政策が、取るに足らぬ少數派議員等の行動によつて阻止せられつつある。しかも彼等は下院が認めて議會に於

ける犯行とする種々の妨害手段を亂用して憚からないのである。其爲め本院の尊嚴と威信が重大に脅やかされているのを擁護する必要がある。しかも慣行の法規と議事手續の運用では、下院の立法權は無力である。そこで新しい非常手段が不可避的に必要である。よつて議員のこれ以上の發言を拒否し、直に議長より本案の審議を進行せしめ、以て下院の意思を最善に遂行せしめるについて、下院の支持に信賴することを得ば滿足である。余は下院が是等の處置に有効なる一切の權能を行使する用意あることを確信する。秩序ある討議を確保する後日の方法は、これを下院の決定に待たねばならないのであるが、しかし討議にモット實効的な規制を確立するか、又はモット大なる權能を議長に附與するか、何れか必要であることを玆に附言する。」(Mackenzie, The English Parliament, 1951, pp. 137-8)

そこでブランド議長は、政府案上程の動議に對するアイルランド議員の修正をここに採決にかけると、徐ろに嚴肅な語調を以て宣言した。採決の結果は贊成一九、反對一六四で、政府は壓倒的多數を以て、アイルランド黨の妨害から始めて救われたのである。だが逆にいえば、それほどの壓倒的多數を持つた政府は、その何分の一にも過ぎない小勢の爲めに、三日二晩なやまされ通おしたのである。

しかもブランド議長のこの宣言は、法規にも慣例にもない越權の行爲であつた。英國國會に於ける言論は絶對に自由であつて、この時代にはまだ討論終結の法はなかつたのであるから、これは議長の大膽きわまるクー・デターであつた。アイルランド黨がこの不意打ちの逆轉に狼狽したのはいうまでもない。彼等はこの全週の晝夜を妨害に打込む計畫であつた。ところが其時刻にちようどパーネルは、議院附近の一旅館で寢ていて議場にいなかつた。そこでジャスティン・マッカーシーが立つて何事かいわんとしたが、忽ち野次り倒された。ここに於てアイルランド黨は口々に「特權」「特權」(言論自由の特權)と叫びつつ、議席から立ち離れ、一人一人議長席に敬禮して總員退場した。議員が退場するとき、議長席に向つて敬禮するのが、古來英國下院で守られる禮儀である。この場合でも彼等はさすがにこれを守ることを忘れなかつた。

政府はこれで完全に救われた。すぐに議事を軌道に乘せ、速かに讀會に入つたが、九時半一旦散會した。月曜日の午後四時から、水曜日の午前九時半に至る三日、前後實に四十一時間半に及ぶ未曾有の長討論であつて、空前でもあり絶後でもあり、英國國會史上、否な世界の議會史上最長の記錄である。

一〇　討論終結法の採用

急を聞いてパーネルが議院に歸つて來たときは、萬事すでに休していた。黨員等は彼を取りまいて徒らに切齒憤慨するだけであつた。午後四時再會するや、一アイルランド議員はブランド議長に對し、議長は何等の權能あつて、今朝の如き討論停止を行つたのであるかと詰問した。議長がこれに答えて「自分一人の責任に於て、議院に對する義務の觀念から行つた」というを聞いて、何人よりも最も歡喜喝采したのは老首相グラッドストーンであつた。喝采が終るのを待つてパーネルが立上がり、議長は議員の特權を侵害したものとして、彼を彈劾する決議案を提出したいと提議し、またここで激しい討論が開始された。この討論つづいて五時四十五分に至るも止めないので、更に後日に延長する動議を可決して漸く散會することを得た。

議長ブランドがアイルランド議員の發言を停止し、討論を打切つたことは、當時にあつてはたしかに越權であり、言論自由の特權を無視したものであるに相違なく、しかもその特權は英國民の祖先が、生命を賭して克ち得た貴重の遺產であるのだから、議長こそ有らゆる侵害に對し、死力をつくして守護すべき筈であるのに、却つて自ら侵すのみか、議院に對する義務の觀念から敢てこれを爲したと宣言した其一言は、一身の進退を賭けた大決心に出たものといわねばならない。ところが實はその前日、彼と與野黨兩首領との間に、打合わせが秘密に行われていたのである。卽ちブランド議長の日記によれば、彼は自己の職權に於て討論を打切ることによつて、議會を難局から救うことが、彼の義務であるとの結論に達し、二日目

（二月一日火曜日）正午グラッドストーン首相を招き、次ぎの二つの條件に於て、たとえ如何なる妨害があつても、問題を片付ける用意があると告げた。

1　討論を翌朝までつづける。それほどに延ばすのは、事態が非常に重大であること、並びに彼が將さにとらんとする手段の必要であることを、國民に明白に理解せしめる爲めである。

2　議事法規を再檢討して、下院または議長にモット權力を附與すること。

グラッドストーン首相は速かにこの二條件を承諾し、同日午後四時下院が開會し、ブランドが議長席にある間に、閉議を開いて承認した。更にグラッドストーンの同意を得て、野黨（保守黨）の下院首領ノースコートにも其次第を通告したが、その他には下院事務總長アースキン・メー（英國國會法の最大權威者）以外誰にも知らしめなかつた。ノースコートは初めこれを聞いてビックリしたが、結局反對ではないといつた。ブランドは即ち愼重周到な用意を以て最後の決心を斷行し、ここに世界の議會史上最も頑迷執拗な妨害を、極めて手際よく且つ頗る有効に防止したのであつた。同時にこれによつて英國國會に始めて討論終結の法を採用するに至つたのである。

即ち翌日の議場に於て、グラッドストーンは討論終結を一決議案として提出した。この決議案が討論に入る前、內相サー・ウイリアム・ハーコートは、アイルランド議員マイケル・デーヴィット（下賤な出身であるけれど、パーネルも憚かるほどの純潔な、しかも有識な指導者）が、假出獄の條件を破つた爲め再逮捕されたと報告した。パーネルは直に立つて、その破つたという條件とは何であるかと質問したところ、ハーコートは質問を無視して答えなかつた。すぐグラッドストーン首相が決議案提出の爲め立上がつた。アイルランド議員ジョン・ディロン（後年アイルランド黨の首領）はそれを遮つて、デーヴィット再逮捕の理由をまた質問した。しかるに議長はそれに取合わず、首相の發言を促がした。ディロンは質問を固執して讓らない。ここに於て議長は彼に退場を命じたが、命に服しないので、遂に守衛長の手によつて場外に引出された。グラッドスト

ーン再び立つて提案せんとしたところへ、今度はパーネルが首相の發言を停止するという大膽不敵な動議を提出するに至つて、議場は極度に興奮し、非常な大混亂に陷つた。よつて議長はパーネルに退場を命じたがその効なく、彼の一味はあとからあとから妨害を演じて少しも屈せず、三十五名の議員が續々退場せしめられた。それに對しアイルランド黨は餘の黨員を呼び入れ、グラッドストーンが立ち上がると、またもや一人一人首相に對する發言停止の動議を持出すので、その都度また一人一人退場を命ぜられた。アイルランド議員が漸次議場から驅逐された後、始めてヤット討論終結に關する決議案が上程され、修正を經て通過成立することを得たのである。

通過した決議案とは、討論終結の緊急動議を、四十名の議員が起立して支持するときは、無討議によつて上程せられ、出席議員三百名を下らざる議場に於て、一對三以上の多數で贊成すれば、議長は當面の議事を、彼の適當と信ずる所により處理することが出來るというのである。即ち下院議長はこれによつて、議案の討論を終結し、審議を打切り、速かに採決にかけることができる權能を與えられることになつたのである。前日の議場に於てブランド議長が求めた通りの權能を與えられたのであつて、英國國會史上始めて討論終結（The closure of debate）の制度がここに創設されたのである。一八八一年二月三日のことである。最初はこれをフランス流に Clôsure といつていた。討論終結の法は夙にフランス議會で行われていたからである。例の皮肉な政治家ランドルフ・チャーチルは好んでこのフランス語を用いていた。

この討論終結の新議事法によつて、アイルランドの暴動を鎭定するグラッドストーン政府の身體財產保護法——アイルランド人の所謂彈壓法が、アイルランド黨の頑强な妨害を排して國會兩院を通過し、翌三月いよいよ實施せられたのであるが、下院はこの法案の討議に、會議を開くこと二十二回、前後約一か月を費やした。

（註）前掲八、九、一〇の三項中の記述については主として Michael MacDonagh, The Speaker of the House, 1914, pp. 318-325 から資料を得た。著者は十九世紀末から廿世紀初めにかけて二十餘年間下院に出入した老練な議會記者で、外に The Book of Parlia-

ment, 1897 もまた彼の名作である。後に The Pageant of Parliament 及び The Reporter's Gallery の二著も英國議會に關するものであるが、一九二九年の The English King は多分彼の最後の著作であろう。その他私には未見の書であるけれどアイルランド自治運動の歴史や、アイルランドの著名な政治家の傳記の著作がある。

一一　獄中にて休戰條約

この新定の身體財産保護法は、一名彈壓法と呼ばれるように、アイルランドの農民暴動を鎭定するに、人身保護律を停止し、アイルランド太守が危險人物視したものを、一網打盡的に逮捕する彈壓權を、太守に與えたのであるから、ダブリン政府はこれによつて一擧に暴徒を掃滅せんと期したのであつたが、用心深きグラッドストーンは、强權一偏を以て臨むの効果なきを察し、これと併行して農民の不平を緩和する對策として、豫ねて農民等の間に强力な反抗團體たる土地連盟（Land League）の要求を容れ、硬軟兩樣の手段を以て事態を救濟せんとした。それが一か月後の四月（一八八一年）に下院に提出した土地改革法案であつた。

これは農民に安定した借地權と公正な小作料と土地賣買の自由を保障したもので、その內容は土地連盟が要求していたものよりも、遙かに寬大な改良であつて、その爲め政府內にも反對者を生じたほどの思切つた英斷であつた。だから土地改革法案を見て、パーネル一派は事の意外に驚き、その對策に心中甚だ窮したのである。今さら反對の鋒を收めて英國政府に迎合する譯に行かない。これを喜ぶように見えてはいけない。といつて妨害して法案が不成立となつては尚いけない。彼等は反對の行きがかり上、進退にハタと窮したのである。そこで彼等は一種の洞が峠をきめ込み、法案が他黨の反對に遭つて危險に瀕すると見れば、忽ち加勢に飛び出し、旣に形勢安全と見れば、再び攻勢に一變するというような、出沒自在な戰法に出た。審議四か月の後、七月末（一八八一年）土地改革法案は下院を通過し、上院に入つて多少難行したが、結局通過して八

月末新法律となつた。

かくして一八八一年の國會會期は一月に始まり、八月に終つたのであるが、この八か月間の全會期中、下院の會議一千四百時間、その中、夜半を過ぎたもの二百四十時間で、演說一萬四千八百卅六回、その中の六千三百十五回は實にアイルランド黨議員によつて占められたのであるから、議長ブランドのいう如く、「パーネルは彼の部下廿四名の少數を以て、全下院を支配したのである」。

一方に土地改革法によつて、アイルランドの民心を懷柔しつつ、他方に彈壓法の武器を持つた官憲は、その危險視する何者をも容赦なく捕縛し始めた。しかしパーネルには輕々しく手が下だせなかつた。ところが同年十月（一八八一年）アイルランドの某地で、彼が首相グラッドストーンに對して痛烈な人身攻擊の演說をしたことが政府の耳に入り、この機逸すべからずと即時パーネルを捕らえて、ダブリン郊外キルメーンナムの獄に投じた。彼と共に有力な黨員數名もまた投獄された。パーネル逮捕の報ひとたび傳わるや、英國人は飛びあがつて喜んだ。グラッドストーンが議會で、本日、法の權威を破壞し、アイルランド人民に無政府的壓制を加わえんとしたものを捕らえたと宣言したのを聞いて、全英國を擧げ、恰かも憎むべき强敵に對して大勝利を得たように、逮捕のニュースを雀躍狂喜した。

ところが逆にこれが政府の失敗となつた。パーネル等を逮捕すれば、アイルランドに於ける暴動を威壓することを得るものと豫期したのに、却つてますます暴民の怒りを刺戟し、暴動少しも衰えないのみか、一層その殘虐を加え、殆んど言語に絕する慘酷な蠻行が頻發するに至つた。暴動は彈壓法前に比して六割も殖え、殺人放火に至つては三倍にもなつたのである。そこで政府も彈壓の行過ぎを速かに認めた。何よりも先ずパーネル等を一日も早く釋放するのが得策だと考え、できれば彼等が脫獄することを、ひそかに望んだのであるが。パーネルはそれを知つて知らぬ顏をしていた。たまたまパーネルの姉デリアの悴がパリで病死し、その葬らいに行くというのを口實にして、官憲はこれ幸いと彼の假出獄を許した。そのとき

またパーネルとオッシー夫人との間に生まれた嬰兒が死んだので、彼は更に英國にも立寄ることを得た。在獄六か月目の一八八二年四月のことである。その英國にある間に、オッシー夫人の正夫たるオッシー大尉（Captain O'shea）なる友人が、パーネルと商相ジョセフ・チャンバーリン及び首相グラッドストーンの間を奔走して、政府と妥協の意を通ずる機會が開かれたのである。

この交渉に最も熱心であつたのはチャンバーリンであつた。政府はアイルランドに對し强硬政策で臨んだものの、少しも意の如くならず、今では殆んど手を燒いてしまつた一方に、パーネルまた暴徒の暴動を喰いとめんとする彼の今日までの努力が、最早や無用であるように感ずるに至つた所であつた。そこでオッシー大尉は使者として、チャンバーリンとの妥協工作を始めたのである。この邊で解決の途を發見せんと、双方の意見が一致した。だがこの工作には農民側に小作料滯納などいう困難な問題があつて、なかなか進捗しなかつたけれど、兎に角にパーネルと政府との間に休戰協定が成立するまでに、談の目鼻がついた。政府は小作料滯納の農民を救濟する立法手段を講ずる代わりに、パーネルは暴動の鎭靜に努力することを約束し、尚キルメーンナム獄中の同志を釋放し、また土地法を更に更正することにも政府が同意した。これを「キルメーンナム條約」（Kilmainham Treaty）といい、グラッドストーンとパーネルが署名し、チャンバーリンがこれに參加した。かくて一八八一年十月逮捕され、翌一八八二年五月出獄するまで七か月にして、パーネルは再び下院の議場に歸つて來た。

それは五月四日のことであつた。その二日前、アイルランド所管大臣フォスターはパーネル等の釋放に反對して辭職し、その辭職の理由をその四日の下院で演說している最中、しかも今まさにパーネルについて言及した其途端に、本人のパーネルが議場に入つて來たのである。アイルランド議員は歡呼して彼を迎えた。その歡聲に壓せられてフォスターの發言は全く潰滅してしまつた。パーネルは恭しく議長に敬禮した後着席したが、つづいて討論に參加した。

政府側の態度は俄然和協的となり、パーネルまたこの頃よりして言動を愼重にするようになつた。形勢は好轉するかに見

えた。

一二　フェニックス公園虐殺事件

ところがそれから二日後の五月六日（一八八二年）、アイルランド首府ダブリンに於て、驚くべき怖ろしい一大慘事が勃發したのである。

政府のアイルランド對策緩和を不平として、太守クーパー卿が辭職し、後任のスペンサー卿が初めて赴任入國するにつき、新任のアイルランド所管大臣フレデリック・カヴェンディッシュ卿と事務次官トーマス・バークの兩人同行して、同日ダブリンに來着したのを、日沒フェニックス公園に要して、數人の兇惡非道な暗殺團が、見るも無殘に斬殺――なぶり殺しにして、剩えとどめさえ刺したのである。凡そ古今の政治暗殺に、これほど殘虐な殺しかたをしたものはあるまい。全英國民が驚動し憤怒したのは當然であるが、パーネルはこの報を聞いて愕然自失し、氣力拔けて茫然絕望の餘、政界引退をも考えるようになつた。彼ほど强烈に暴力を憎くんだものはなく、暴力の行使を彼ほど熱誠こめてアイルランド人に戒しめたものはない。その爲めに彼は今日まで如何に苦心して來たか知れない。チョウドこの虐殺事件の當日、彼は彼の親友デーヴィットと汽車中にあつた。彼は其夜ダブリンであんな大事變が起ころうとは、固より夢にも知らなかつたが、その車中の談話にも、しきりに暴力を否定して、それを憎む激しい彼の語氣は、「恰かも英國政府の大臣にでもなつて、彈壓法案を議會に提出するような」すさまじい權幕であつたと、後日デーヴィットが語つているように、あれほど議會では極端な對英反抗態度を露骨にしながら、暴力行使の一事に至つては、臆病なほどにアイルランド人を制止したのである。それにも拘わらずアイルランドの暴民がこの兇暴きわまる蠻行を敢てしたというのであるから、パーネル多年の苦心が、遂に悉く水泡に歸したのに絕望した彼の悲痛な心情は、察するに餘りあることである。

いな彼はこの次ぎは必然自分が暗殺される番だと思うようになつた。それからは彼は議會にある間も、身にピストルをはなさず、ロンドン市中に出ても、上着の襟を立てて面をかくし、人目を忍んであるいた。いつ背後から刺されるかも知れないと、絶えず口にするようになつた。フェニックス公園の惨事が、彼に與えたショックはそれほど深刻であつた。先きの「キルメーンナム條約」の妥協を案じて、激烈な恐怖病にかかつたのである。遂にその苦惱に堪えなくなり、グラッドストーンに書を送つて、若しグラッドストーンが彼の政界引退を可とするなら、その忠告に從うとまで訴えた。グラッドストーンは「彼が公生活から引退することによつて、何の好結果はないのみならず、却つて惡結果を來たすであろう」から、彼がアイルランド黨を依然指導するのは、彼の義務であるといつて、パーネルを勇氣付けた。

一方グラッドストーン政府は、フェニックス公園事件に對する英國民の激昂に應じて、現行彈壓法を更に嚴化し、一層の嚴法を以てアイルランドに臨むの止むなきを感ずるに至つた。一旦緩和せんとした對策の逆戻りである。即ち事件後直に新彈壓法案を議會に提出した。しかしこれに對するパーネル以下黨員の敵對心は、今や前日の活氣を大に喪つていた。彼等もまた虐殺の慘狀に驚魄したからである。かくて新法案は結局壓倒的多數を以て可決せられた。ただしアイルランド黨の妨害が全然なかつたのではない。委員會に於て討論は徹夜して行われ、妨害の故を以てアイルランド黨議員二十五名が退場を命ぜられ、最後には例の討論終結の非常手段に訴えるの外なきに至り、これに反抗して領袖ジャスティン・マッカーシー以下の黨員が席を蹴つて場外に出たという騷動をも演じた。法案は五月中旬に提出されたのであるが、通過したのは七月初旬であるから、前後一か月半を費やしたことになる。だがパーネルはその間終始きわめて不活潑であつた。「この場合、彈壓に反對する道德上の權利はないと感じたからである」(前掲 Ervine, Parnell, p. 206)。

しかしパーネルは久しからずして再び氣力を取りかえした。暴力を排擊するに於て、これまでよりも以上に强硬な態度に出るようになつた。即ちすぐにアイルランドに於ける婦人土地連盟(Irish Ladies' Land League)を解散せしめた。これは

半狂亂の過激運動をした婦人の團體で、前にも一言した如くパーネルの妹アンナは、その首魁の一人であつた。これを解散するには借金の始末をせねばならなかつた。そこでデーヴィットが黨の資金の內から出してやれといつた處、パーネルはたとえ一シリングでもやらぬと、言下に拒絕したほどに、婦人土地連盟の運動を憎んだ。アンナは終生、兄チャールスに對して惡聲を放ち、死するまで反抗しつづけた。パーネルは暴力の直接行動を飽くまで排擊する決意をいよいよ强うすると共に、政府に對してアイルランドの自治を要求し、これによつて問題解決の端緒を得んと、グラッドストーンとチャンバーリンに働きかけたのである。その爲め彼は一黨の規則を一層嚴格にして、彼が政府と約した「キルメーンナム條約」を忠實に守り、英國政府とこの上無用の爭を繰返えすことを止めんとした。

それでも一八八二年の秋の國會會期に、前年創設された討論終結規定の改正案を、政府が提出したときには、アイルランド黨はこれを妨害して、十月廿四日開會、十二月二日閉會した全會期四十日間を、反對討論に費やしたのである。新規定は、議長はその判斷によつて、討論の打切りを議場に問うことが出來る。それが二百名以上の多數によつて支持せられたら、打切りは成立するというのである（後一八八八年改正されて、一百名に減じられた。これが現行法である）。だがこの討論のときも、パーネル自身はその妨害に曾ての熱はなくなつていた。

一三　藝術——パーネルの妨害戰術

一八八三年以後、パーネルの對英政府反抗活動は、次第に衰退の徵を示した。彼の率いるアイルランド黨の議會に於ける妨害は固より決して止んだのではなく、徹夜以て政府に抗戰する議事引きのばしの戰法は、依然彼等の慣用した所であつたけれど、パーネル自身はそれに深入りしなくなつた。この變りかたを見て、黨の內外に彼の心事を疑うものが出るようになつた。その轉身の變化があまりに著しかつたからである。

この變化には二つの譯がある。

1　パーネルは首相グラッドストーンと、その閣内に有力なチャンバーリンに接近して、アイルランドに自治（獨立の國會を設けること）を認めしめんとし、最初オッシー大尉なるものを使者として交渉を始めたが、今はオッシー夫人を使つて連絡をとらしめた。殊にチャンバーリンは事を成功せしめんとて、熱心にパーネルの言に耳を傾けた。アイルランドの無政府狀態を救うに眞劍であつたからである。ただしチャンバーリンは自治案には反對であつた。アイルランド政府に十分な權能を與えはするが、同國は依然統一王國に屬せしめるというのが、彼の主張であつた。後年彼がグラッドストーンの自治案に反對して、自由黨から分離し、保守黨と合して所謂統一黨（Unionists）を組織したのもその故である。だがパーネルはチャンバーリンの誠意と實力を信じ、彼を通じて政府を動かし、アイルランド問題解決の途を發見せんと期したのであつた。かくて「キルメーンナム條約」から漸次英國側に對して妥協的となつた。英國を敵視して、何でも反對妨害する破壞的一方であつたのが、今や協力的、建設的となるに至つたのである。そしてその動機が、アイルランド暴民の暴力に對する執念、最早や到底度すべからざるに失望したからであるのはいうまでもない。

2　政府との最初の接觸に使つたオッシー大尉は、パーネルが始めて政界に出た頃からの友人であつたが、自ら大尉と稱するけれど、實は本職の軍人ではなく、大尉の株を金で買つて名乘つているような素性の惡い男であり、從つて性格甚だ下劣な者であつたのを、パーネルが誤つて仲間に入れ、下院議員にまで推擧したのであるが、最後には惡事を働いて遂に沒落した。しかるにパーネルはこの男の妻カザリーンと通じて、その間に三人の女子をもうけるに至つたのである。この秘密は夫オッシーがよく知つていながら、知らぬ振りをして、パーネルを脅喝する具に利用した。しかし初め久しい間この密事を感付くものはなかつたが、いつしか世間に洩れて、アイルランド黨内の噂にのぼるほどになつた。この私行の爲めにパーネルは心を苦しめ、頓に健康を害し、自然意氣沮喪して、これまでの勇猛心を失うに至つたのが、彼の轉身の精神的原因とな

つたのである。後年オッシー大尉がその妻に對し、密通を種にして離婚訴訟を起し、パーネルとの秘密を暴露するに及んで、パーネルは黨から逐われ、グラッドストーンからも見放なされ、ついで悶死するのである。

かような譯で、パーネルの活動――特に彼の得意とした議會に於ける妨害戰術は、一八八三年以後次第にその活潑性を失うようになつたのである。從つて彼の率いるアイルランド國民黨は昔日の猛威を振わず、後年パーネルの死後つぎつぎに黨首の地位を繼いだ人々も、英國政府に對する反抗妨害の態度は依然改めなかつたけれど、彼等も漸次妥協的となり、再び當年の頑迷執拗な戰意を示すことはなかつた。これには英國政府また從來の彈壓政策を改め、進んでアイルランド國民の要望を容れるようになつた對策の轉換による所、甚だ有効であつたことも認められるが、何れにせよアイルランド黨は、パーネルの晩年以後著しく其過激な妨害戰術を緩和したのが事實である。

しかしパーネル時代の行動が過激であつたとはいうものの、たびたび繰返えして申す如く、彼及び彼の一派は議會に於てもアイルランドに於ても、決して暴力を行うことはなかつた。彼等の議場に於ける行動は、堅く戒しめていつも合法的であつた。少なくも議事法規の線内で妨害の手段をつくすに細心であつた。しばしば不穩當の言を發して、議長から退場を命ぜられ、登院を停止せられたものもあつたけれど、腕力暴行の故を以て嚴罰せられたものは、曾て一人もなかつた。またアイルランドに於ける過激の一派中には、放火、殺人、傷害、强奪等兇暴無法を極めたものがその跡を絕たなかつたけれど、彼は常に極力これを排擊して、暴力の亂用を阻止するに苦心盡力したること既記の通りである。

しかるにそれにも拘わらず、彼を憎んで極惡の罪に陷れんとするものが、意外の邊より現われた。パーネルは前記フェニックス公園慘殺事件の共犯者たる疑があるというのである。それは實に英國最高の新聞タイムス（ロンドン）がいうのであるから、全英國、否な全世界を驚かすものであつた。

一八八七年三月七日から、タイムスは其紙上に「パーネル主義と犯罪」（Parnellism and Crime）と題する連續記事を、月

餘に亙つて連載した其四月十八日の紙面に、公園事件から九日目の一八八二年五月十五日附パーネル自筆の書簡なるものの現物を複寫して掲載したのである。その書簡の意味は、殺されたカヴェンディッシュ太守は氣の毒であつたが、バーク次官の慘死は當然である。というのであつた。絶對の信用あるタイムスが、パーネル本人自筆の書として暴露し、しかも同日の社説に於て、我社はパーネルの共犯を立證する文書の現物を入手し、「最も注意深く且つ精密の調査を遂げた結果、眞正確實なものと信ずるを以て」その中の一書を複寫して、本日の紙上に發表したと公言したのであるから、さてこそ果してパーネルはあの暴虐無殘な暗殺事件の共謀者であつたと、一般の大勢は立所に彼を極惡非道の罪人にきめてしまつた。彼を憎み彼を卑やしんで、政界より葬り去らんとする當時の英人間の猛然たる氣勢は、パーネルの沒落今や眼前にありと思わしめた。彼がそれは僞筆の似せ物であると抗辯しても、タイムスの信用絶對性を盲信する英人は、彼の否定に耳を藉さなかつた。

しかるに後に至つて、右の書簡が眞赤な似せ物の僞筆であることが、下院の任命した三名の裁判官より成る調査委員會の審査によつて遂に明白にせられた。この審査はトテも精細嚴密を極めたもので、委員會の開會から終會まで一年二か月を超え、開廷一百廿八日、證人を喚問すること四百五十人に及んだ。パーネルの潔白はここに立證決定されたのである。

僞筆の犯人はリチャード・ピゴットという元小新聞の社主であつた。犯人は所犯暴露すると共に國外に脫走したが、追跡せられてマドリッドで自殺した。タイムスに至つては、當時の支配人ジョン・マクドナルドが、マンマと詐欺師にだまされて、殆んど何等吟味することなく、輕率にもこの僞書を大金を拂つて買取つたのである。しかもその上に事件調査委員會の訴訟に費やしたもの、實に二十五萬ポンド（今日の邦價で二億五千萬圓）の巨額に及び、これに右の記事の取材上の全出費三萬ポンド（邦價三千萬圓）を加えれば、莫大な金額に上ぼることになる（R. C. K. Ensor, England, 1952, pp. 182-3）。それから二十餘年の長い間、タイムスが財政上に社運の衰勢を疑われた其苦難の大原因は、このパーネル僞書事件の失敗にあるとせられる。そればかりではない。「ローマ法王は時に過を犯すことがあるが、タイムスは絶對に過を犯さない」といわれたタ

イムスが、この事件の爲めにその多年の權威を一朝にして失墜した無形の損害は無限であつた。それと反對にパーネルの名聲は再び大にあがり、更に聲望を加えて政界に復歸した。

だがそれも實に束の間に消えた。僞書事件が明白にされてから、僅か一か月にして、一八八九年十二月廿二日、彼とオッシー夫人の關係が、オッシー大尉の裁判所に提起した對夫人離婚の訴訟によつて、遂に暴露されたからである。それより一年の後（一八九〇年十一月十七日）裁判所は離婚の判決を下した。政治家としてパーネルのかがやかしい生涯は、これで確定的に終焉を告げたことになる。それからまた約一年たつた一八九一年十月六日、煩悶と病衰を以て心身ともに疲れ果てた彼は、ブライトンの自宅でその夜半さびしく死んで往つた。享年わずかに四十五。數日後、遺骸は彼の故國アイルランドに運ばれ、ダブリン郊外の墓地に埋められた。埋葬の日、秋の雨が終日しとしとふつていた。

始めて英國下院に入つたのが一八七五年、彼が廿九のときであつた。五年後にはアイルランド黨首バットを退けて自らこれに代わり、十一年後には事實上に下院を支配し、十六年後若くして死んだ。その下院にあること十六年の間、小勢ながらもよく英國政府と抗戰して、議事妨害の戰術に虛々實々の妙技をつくし、英國議會史上最も怖ろしい反對黨の威力を發揮したパーネルの名は、議會政治に反對黨の指導者として不滅である。「アイルランド黨を以て、妨害の發明者というのではないが、しかし妨害を一つの藝術となしたものはアイルランド黨である」（Sir Ivor Jennings, Parliament, 2nd ed., 1957, p. 127, note）というそのアイルランド黨とは、黨首チャールス・パーネル其人である。

（註）パーネル傳の著書は相當に多いが、私がここでは其荒筋を St. John Ervine, Parnell, 1925 によつた。この書は從來世に出た多種のパーネル傳中にあつて比較的最もよく編集されたもののように思う。著者はアイルランドに於ける著名な戲曲文學者であるので、本書が矢張り優れた文學的作品になつているのも、またその特色である。